市史だより
Gači-majaa がちまやぁ

第15号・2008年9月30日(火)発行
年3回 (5・9・1月発行)
編集・宜野湾市教育委員会文化課 市史編集係
〒901-2710 宜野湾市野嵩1-1-2

問い合わせ・情報提供先
☎ (098)893－4430
Fax (098)893－4434
Kyoiku08@city.ginowan.okinawa.jp

デイリーオキナワンのパーティー。左から５人目が２代目編集長のノバート・カーティーさん（1947 年）

宜野湾村（現市）普天間には、1946（昭和 21）年から 48（昭和 23）年のおよそ３年間、アメリカ人向け英字新聞社「デイリーオキナワン（THE DAILY Okinawan)」がありました。

そこで２代目の編集長をしていた(故)ノバート・カーティーさんが保管していた当時の新聞や写真等が、夫人のドナ・カーティーさんや元従業員のデイビッド・リンデンさんから、山口栄鉄さん（元県立看護大学教授）を通じて琉球新報社へ寄贈され、今年４月に同社にて展示会が開かれました。宜野湾市教育委員会では、過去の宜野湾とデイリー社との関係をふまえて、琉球新報社と沖縄県地域史協議会の共催を受けて「デイリーオキナワン里帰り展」を市立博物館で開催しました。

当時、デイリー社の事務所は、現在の普天間高校にありました。戦前この敷地には、中頭教育会館・中頭地方事務所・沖縄県立農事試験場普天間試験地があり、戦災を免れたこれらの建物のうち、中頭地方事務所を事務所とし、その他の建物を倉庫や宿舎に使用していました。社では、アメリカ人の他にフィリピン人や沖縄の人が働いていました。そして新聞の発行以外にも、当時の村役場や学校への用紙・筆記用具類の援助や、「うるま新報」などの民間の新聞社へも用紙を提供していました。

今回の企画展をきっかけにドナさんと長男のグレッグさん、山口栄鉄さんが来沖しました。生前、ノバートさんが「沖縄のためにいつか役立つ日が来る」と話されていたデイリー資料の沖縄・宜野湾への里帰りが実現しました。これからのデイリーオキナワン資料の研究・活用が期待され

アメリカからのお客様

9 月 10 日（水)、山口栄鉄さんが「英字新聞デイリー・オキナワン里帰り展」を見に来館されました。山口さんはデイリーオキナワン紙を琉球新報社へ寄贈する橋渡しをされた方で、現在アメリカに拠点を置いて琉球史の研究をなされています。

展示を見る山口栄鉄さん(10 日)

展示会をご覧になった山口さんは「とても素晴らしい展示会で、当時のデイリーの関係者に良い報告が出来ます。」と喜んでいました。

22 日（月)、山口さんからの連絡をうけて２代目編集長（故）ノバート・カーティーさんの夫人ドナ・カーティーさんと、長男のグレッグさんが遠路はるばるフロリダから展示会を見に来てくださいました。

またデイリー社に勤めていた宇久田テイ子さん、蔵元芳子さん、許田盛徳さんも来館し、カーティーさん一家を出迎えました。そこでのお話を聞かせて頂いたのでご紹介します。

Q:寄贈をしてくださった経緯を教えてください。

山口さん：アメリカでのウチナーンチュの集まりで、リンデンさん（元デイリーのスポーツ記者）とは一度お会いしていました。たくさん沖縄に関係する資料をお持ちのようでした。ある時、リンデンさんが私に資料のことで相談してきました。さらにそこでカーティーさんもたくさんの資料を保存されていると聞き、合わせて寄贈してはどうかと思ったのです。そこで、リンデンさん、ドナさんと食事をしながら話し合って琉球新報へ寄贈したのです。

山口さんとの座談会(10 日)

ドナさん：ノバートのボストンバッグ一杯の資料がありました。それを引越しのたびに運んでいましたよ。

Q:たくさんの写真を後世に残した2代目編集長のノバート・カーティーさんは、どんな人だったのですか？

ドナさん：彼は、19 歳で沖縄に兵士として来ました。高校で新聞を作った経験からデイリーオキナワンの編集長になったようです。余った新聞や、記事に載せるためだけに撮られた写真は捨てられていたそうです。それを彼は貴重なものだからと言って大切に保管していたのです。生前「これは貴重な資料だから取って置くように」とよく話していました。

Q:退役したカーティーさんは、アメリカでどんな生活を送ったのですか？

ドナさん：退役した後、大学へ進学しました。退役軍人の審査は厳しく、色々な審査がありましたが、彼は成績が良かったので奨学金を受けることができました。その後は、飛行機やスペースシャトルのエンジンなどを作る会社に入りました。

Q:その会社はどんな会社だったのですか？

グレッグさん：プラット＆ウィットニーというのはロケットや、ジェット機のエンジンを作る会社です。父はその中で優れた 50 人のエンジニアのうちの 1 人でした。今では 5,000 人もの従業員を抱えるアメリカでは有名な会社です。

再会を果たしたデイリーオキナワン関係者(左から上段：ドナさん、許田さん、グレッグさん、下段：蔵元さん、宇久田さん)

Q:ノバートさんは生前沖縄についてどんな話をしていましたか？

ドナさん：ことあるごとに、沖縄の仕事について話していました。それから、若い頃沖縄で一緒に仕事をしていたリンデン（沖縄にいた頃はリンスキーと名乗っていた）とは、沖縄を離れた後も友情をずっと暖めて、連絡を取り合っていました。リンデンさんは今でもお元気で、展示会の写真の一部はリンデンさんが送った物なのですよ。19 歳という若さで新聞社の編集長という立場におかれて、周りの人に指示するのは大変じゃなかったかなと思いました。

この他にもノバート･カーティーさんが沖縄で過ごした日々のこと、捨てられた資料を大切に保管されたこと、沖縄戦で貴重資料が米兵によって持ち去られたことなど貴重なお話をいただきました。本当にありがとうございました。

デイリー従業員60年ぶりの再会

展示会の期間中、ほぼ 60 年ぶりのデイリー従業員の再会に立ち会うことが出来ました。許田盛徳さん（78）、宇久田テイ子（旧姓・天久）さん（82）、蔵元芳子（旧姓・宮里）さん（80）が再会しました。

許田さんはデイリー社の敷地内に住込みで働き、タイピストや通訳までこなしました。デイリー社が廃刊になった後も、他の英字新聞社や通訳の仕事を続けたそうです。宇久田さんと蔵元さんはタイピストとして、野嵩に住んでいた頃にデイリーに勤めていました。

再会を果たした蔵元さん（左）と宇久田さん（右）

当時を振り返り宇久田さんは「とても丁寧に仕事を教えてくれて、仕事は楽しかった。だから、私はいつも笑っていましたよ」と、当時の様子を話していました。３人はデイリー社を辞めた後も、様々な軍作業を経験し、生活していたようです。

蔵元さんは「まさかこんな所で再会できるとは思わなかった。今日は来て良かった」と話していました。思い出話に花が咲き、当時のこと・現在のことなど話は尽きないようでした。

資料が記録したデイリーオキナワン

■「労政関係書」

文化課所蔵の戦後行政文書のなかに、「労政関係書」という文書綴りがあります。この「労政関係書」には 1946～1955 年にかけての労務文書 - とりわけ 1949 年以前 - 細やかに綴られており、これらの資料には戦後初期における宜野湾村の労働事情が記録されています。そのなかには、デイリーオキナワン（以下デイリー社）に関する記録もみられ、そこからはデイリー社と地域住民との関係の一端がみえてきます。

■ 労務供出

「労政関係書」には「労務供出（送出）状況報告」(「労務供出」については文末の【解説】参照）というシリーズが綴られています。現存する資料は 46 年 12 月から 47 年 11 月にかけての記録に限られますが、そこからは、この時期にかけて宜野湾村が軍部隊に民間人を継続的に労務者として供出し、なおかつ、その供出人数が次第に減少していった傾向がうかがえます。

デイリー社にもほぼ同様の傾向が見られ、47 年 1 月 13 日付の 20 人を最高に、供出人数は急激に減少、これ以降はほぼ横ばいに推移し、47 年 11 月 10 日付の供出人数 1 人を最後に記録は途絶えます（表 1)。

表1
労　務　供　出　状　況　報　告

	職 種	男	女	計
1947.1.13	普 通	20	0	20
1947.1.18	〃	4	0	4
1947.2.11	〃	1	0	1
1947.2.19	〃	0	1	1
1947.2.26	〃	0	1	1
1947.3.20	〃	8	0	8
1947.3.25	〃	0	4	4
1947.3.27	〃	2	0	2
1947.4.1	〃	1	0	1
1947.4.4	〃	1	0	1
1947.4.22	〃	1	0	1
1947.4.29	〃	0	1	1
1947.5.9	〃	0	1	1
1947.6.9	〃	0	2	2
1947.7.15	〃	1	0	1
1947.7.21	〃	1	0	1
1947.8.12	〃	0	1	1
1947.8.26	〃	2	1	3
1947.10.13	〃	1	0	1
1947.10.23	〃	1	0	1
1947.11.10	〃	0	1	1

＊原資料よりデイリーオキナワンの記録のみを抜粋、編集した

☆市史新刊情報コーナー☆

ここでは、宜野湾市史最新刊の情報をちらっと公開しちゃいます♪

●どんな本なの？

宜野湾での戦争はどうだったの？

どうやって宜野湾の基地はできたの？

宜野湾の人達は戦後どんな風に暮らしていたの？

刊行予定の『宜野湾市史』第８巻　戦後資料編Ｉ　「戦後初期の宜野湾　解説編」（仮）は、そんな戦後すぐの宜野湾(今から約５０～６０年前）を、わかりやすく解説することを目指しています（だからタイトルも「解説編（仮)」☆)。

なので、写真や地図をいっぱい使って分かりやすく、大きさも Ａ４で見やすく、オールカラーできれいに・・・そんな本になる予定です。

●ただいま編集中！（発行は来年３月末の予定です）

本のレイアウトは、今は上のような感じですが、まだまだ考えている最中です。

これからさらに進化して、みなさんのお目にかけられると思います。こうご期待！

■「収容所」とのかかわり

このようなかたちでデイリー社への供出状況が推移した背景には、当時、野嵩や普天間が戦争で離散していた人びとを受け入れた「収容所」であったことと関連します。

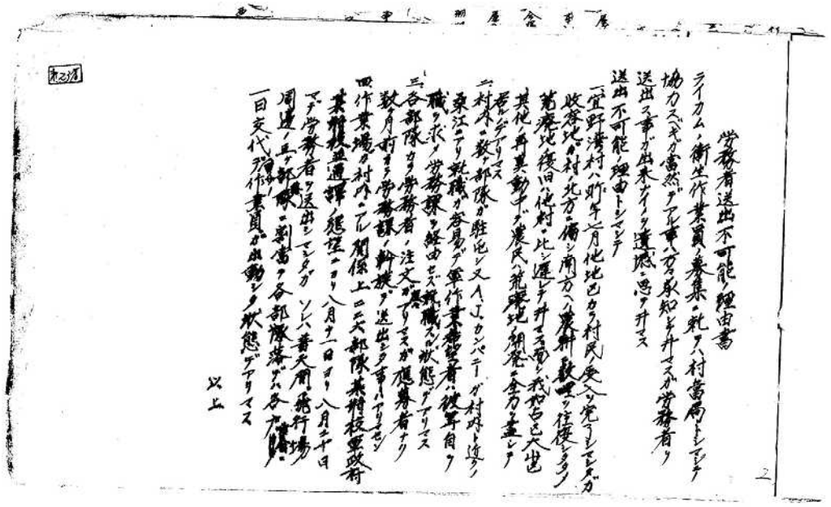
資料によると、デイリー社には労務者の全員（男性 39 名、女性 10 名）が通勤しており（1947 年 2 月 21 日「軍労務者調査報告ニ関スル件」）、その従業員のほとんどは野嵩や普天間といったデイリー社の近隣に住んでいた宜野湾村民だったといいます（松川貞雄さんの証言）。

すなわち、デイリー社は野嵩や普天間といった近隣の「収容所」に暮らす村民を労働力としていました。

■ 地域の再建

一方、47 年に入ると、宜野湾村内の軍用地もゆるやかに開放されはじめました。一応の居住地も確保できたことで「収容所」からの移動も活発化し、嘉数や我如古（現ギノワンボウル周辺）を皮切りに村民が徐々に野嵩や普天間を離れていきました。

時を同じくして、宜野湾村では労務者の枯渇がたびたび問題となっていました。行政文書の記録からは労務供出が不可能だった時期もあったことが確認できます。



資料 1　1947 年 8 月 25 日「労務者送出不可能ノ件」

その理由書（資料 1）によると、軍作業希望者が労務課を経由せずに「就職」してしまうえ、移動中の字の農民が荒廃地の「開発」に取り組んでいることが記されています。

また別の文書では、移動中の字の建設のため、軍作業を辞めてしまう者がいることが報告されています（1947 年 11 月 14 日「那覇港湾作業隊員の募集に就て」）。

■ デイリーオキナワンの雇用状況

デイリー社も例外ではなく、その雇用状況は不安定なものでした。デイリー社のほとんどの労務者はすぐに仕事を辞め、さながら「短期雇用」であったといいます（松川貞雄さんの証言）。

軍用地が開放されるに伴って、「収容所」から村民が離れていき、人びとは字の再建のため尽力しました。いきおい、デイリー社は「収容所」という労働資源を次第に失わざるをえず、労務者が辞めるたびに村の労務課を通じて労働力を供出させていたものと思われます。

【解説】労務供出とは…

戦後間もない頃の市町村は、米軍に対して継続的に労働力を提供するよう要求されており、それを労務供出といいました。

労務供出の見返りとして、市町村は各所にあった売店の売上金をその財源にあてることができました。なお、1948 年度の宜野湾村の収入内訳の大半は、売店売上金によって占められていました。

野嵩のマールアシビに行って来ました！！

～野嵩のマールアシビとは～

今年の旧暦八月十五夜は９月 14 日(日) にあたり、職場や友人の方と観月会をされた方も多いのではないでしょうか。県内には、十五夜に獅子舞や村芝居を行う地域があり、宜野湾市内では普天間や大謝名で獅子舞が演じられます。この日に野嵩では、ウチチウマチー(月祭り) という行事が行われていますが、６年に一度、子年と午年の八月十五夜には、マールアシビという村芝居が行われます。今年は子年にあたり、マールアシビを行うため、公民館の前のあしびなぁ公園には舞台が設置されていました。

マールアシビの当日は、午後２時半頃に野嵩の旧家２か所での拝みが行われた後、道ジュネーが始まります。弥勒、旗頭を先頭に、舞台衣装を着た出演者たちが、旧家からあしびなぁ公園まで練り歩きました。あしびなぁ公園の舞台での出し物は午後５時から、長者の大主や組踊「忠臣護佐丸」、歌劇「真玉橋由来記」などの長編の芝居、舞踊などが演じられ、多くの観客が集まり、賑わいを見せていました。途中、雨に降られる中、最後まで舞台を見届ける観客も多く、６年に一度のマールアシビの迫力に圧倒されてしまいました。

道ジュネー

組踊「忠臣護佐丸」の一場面

～戦前の練習風景～

戦前のマールアシビの練習風景について、興味深い話があります。野嵩には、戦時中に避難壕となったターバルガマという洞窟があり、戦前はその洞窟の中で踊りの練習をしていたそうです。また、組踊の配役を決める場合には、クィーシラビ(声調べ) と言って、候補者たちが公民館の西にあるイーヌヤマという丘陵に登り、そこで候補者たちが台詞を唱え、村屋(戦前の公民館で、場所は現在の公民館と同じ) に待機している役員たちが審査し、配役を決めたという話が残っています。他に、当時はマールアシビに参加しなければ罰金があり、そのため内地へ出稼ぎに出ていても、この時期には野嵩に帰ってきた、という人もいたようです。

国道 330 号からのイーヌヤマ

2008 年マールアシビのプログラム

1、開会のあいさつ
2、舞踊　長者の大主
3、主催者あいさつ
寿、舞踊　かぎやで風
5、舞踊　汀間当
6、民謡
7、来賓祝辞
8、来賓祝辞
9、来賓祝辞
10、舞踊　上り口説
11、舞踊　繁昌節・白保節
12、民謡
13、舞踊　南の島のエイサー祭り
14、組踊　忠臣護佐丸
15、激励のあいさつ
16、舞踊　若松
17、舞踊　谷茶前
18、舞踊　生きる
19、舞踊　下り口説
20、時代歌劇　真玉橋由来記
21、舞踊　高平良万才
22、謝辞および閉会のあいさつ

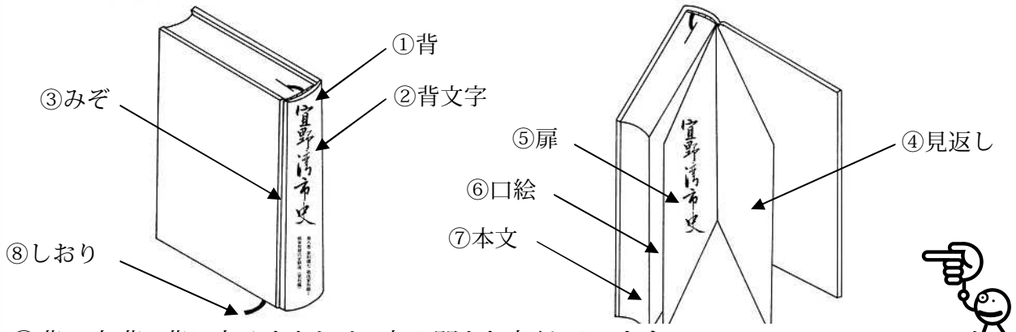
宜野湾市史ができるまで

内容を充実させることはもちろんですが、本の体裁を整えることも大切な作業の一つです。実際の製本作業は印刷所で行ないますが、「このような本を作りたいんです！」という編集者のイメージは伝えなければなりません。そこで今回は、緑色の布クロス表紙が特徴的な『宜野湾市史』の様式について簡単に紹介します。

■製本って何？

製本とは、印刷された用紙を綴じ合わせて１冊の本に仕上げることです。その様式によって、上製(本製)本・並製(仮製)本・和製本に分けられます。『宜野湾市史』は上製本です。表紙と中身を別々に仕上げ、見返しという紙でつなぎ合わせており、一般的には“ハードカバー”と言います。綴じ方は、糸でかがって綴じる糸綴じなので丈夫で、本の開きも良くなっています。

次に本の各部分の名称も合わせて、『宜野湾市史』の実際の様式を見ていきます。



①背：丸背。背に丸みをもたせ、本の開きを良くしています。
②背文字：書名・著者名などを本の背に入れることです。『宜野湾市史』では金属箔をつけて型押しする“金箔押し”をしています。
③みぞ：表紙と背の境目のくぼみのことです。本の開きを良くしています。
④見返し：表表紙と裏表紙の内側に貼り付けて、表紙と中身をつなぎ合わせている紙のことで、ミューズコットン（やわらかな肌合いと色調が特徴で、にじみがない用紙）を用いています。
⑤扉：見返しの次にあり、書名を記している部分です。本文と区別し、コート紙（表面に顔料をつけ、ツヤのある用紙）を用いています。
⑥口絵：巻頭に載せる写真や絵などのことです。写真に適しているコート紙（上記に同じ）を用いています。
⑦本文：本体となる部分。読みやすいように、クリーム書籍用紙（表裏の差が少なくて、不透明度の高い用紙）を用いています。
⑧しおり：ページの間に挟む目印かわりの小糸ひものことで、“スピン”とも言います。表紙に合わせた緑色のひもを用いています。

いろんな工夫をしていて、丈夫で使いやすい『宜野湾市史』です！
読書の秋に、ぜひご覧ください♪

❤文化課のお仕事入門❤

～ 職 場 体 験 学 習 ～

■　嘉数中学校と宜野湾中学校のみなさんがきました♪

文化課には、毎年市内の中学生が職場体験学習にやってきます。今年は嘉数中学校・宜野湾中学校の２年生のみなさんが、文化課のお仕事を体験しました。今回は、市史編集係での職場体験の様子を紹介します。みなさんも一緒に市史編集係のお仕事をのぞいてみましょう♪

野外調査中☆嘉数中のみなさん(５

■　ちょっと地味（？）なお仕事･･･でも大事です！

市史編集係の仕事は大きく分けて３つあります。

①市史編集事業と市内民俗芸能調査事業

宜野湾市の歴史と文化を調べて、本にまとめます。昔の資料、また昔の様子を知っている人はどんどん少なくなってしまいます。調査はまったなしです！

市史の訂正作業中♪宜野湾中のみなさん（９

②資料整理・調査

宜野湾市の資料が失われてしまわないように、収集・整理・保存をします。昔の資料だけではなく、現在の行政文書など、市民会館の地下は色んな資料でい～っぱい!

③普及・活用

ただ調べるだけではダメ！市民のみなさんに役立つように、いろんな形で情報を伝えます。この「がちまやぁ」もその１つです☆

■　手先の器用さも重要？

市史編集係が編集した新しい『宜野湾市史』の本。の間違いを訂正する作業をしています（左の写真）。たった１文字間違っただけでも、すべての本を訂正します。小さな文字の上に訂正シールを張る作業は、かなりの手先の器用さが必要？？

■　どうでしたか？(職場体験の感想をきいてみました)　　☆～お仕事おつかれさまでした～☆

※嘉数中学校のみなさん※

・「仕事の風景や、市史編集の仕事について勉強できました」(崎原駿さん)
・「本のふくろづめをさせられたり、昔の宜野湾市の地図をみたり、本のカバーをつけさせられたり、つかれたけどたのしいのもあったのでよかったです」(玉城大輔さん)
・「きちょうな体験をしたりしてしょうらいでやくだてたりしたいです」(羽地一郎さん)
・「メーヌカーにいったりハウスナンバーを見たり、いろいろな事をしました」(伊波慶介さん)
・「倉庫は、ほこりっぽくて変なニオイダッタケド、見たことないものなどがあって楽しかったです」(伊波正太郎さん)

※宜野湾中学校のみなさん※

・「ふだんはみれない地下倉庫の整理など、いろいろなことができて楽しかったです」(金城隼人さん)
・「楽しかった事：博物館の見学　楽しくなかったこと：ありません！！」(比嘉翔さん)
・「宜野湾市の歴史について、いろいろわかったからおもしろかった」(宇座大貴さん)
・「古地名調査はべんきょうになりました。本の修正はしんどかったですけど楽しかったです」(平安座比呂さん)